

蒙古第二回目の国書到来

文永六年の六月良観を背景として、鎌倉五山の僧侶がこれを援護した変成男子の御祈禱はみごとくに失敗して、その看板にされた隆辨僧正は、面目をつぶしてしまった。これが原因であったかどうかはわからないが、その後隆辨僧正は、鎌倉八幡宮の別当をやめて、再び京都に帰ってしまつておる。変成男子の御祈禱がかなつて、執権職北条時宗に男子が出生しておつたならばそれこそ、諸宗が勝つて、日蓮が負けたと鎌倉中に評判させて、聖人圧迫の手はこの年の中に実行されたであろうが、事實はそうはいかなかったのである。

しかも、この年には蒙古の使者が、一年の中に二回もきておるのだから、聖人の立正安国論の予言の中がいよいよ現実となつてきておるので、諸宗側の聖人に対しての圧迫は、文永六年は変成男子の御祈禱で終つて、これ以上の圧迫は手段がなかつたのである。この勝負は、知るの寺方だけであつたから、諸宗の負けたことは鎌倉の評判にはならずじまいだったのは、まあまあ念禪真言律宗等にとつては、幸いであつたらう。

さて文永六年には、蒙古の使者が二回きたと前述したが、第一回は、文永六年の三月対島にきたことを指す。この時は文永五年の正月に、太宰府に提出した国書の返事をせまつたのである。第二回目の使者は、黒的、殷弘を長として、文永五年の十一月に高麗に到着し、十二月対島に向つたのである。

使節の一行は、蒙古の使節八人、高麗の使節四人、従者七十余人の堂々たる使節である。三月七日太宰府守護所から、京都の六波羅探題に、この使者一行の対島来島が伝えられた。四月二十六日に、京都においては御所で評議が開かれたが、その時は返書を送ることとなつたが、結果は鎌倉幕府の意見に左右されて返書は出さないことに決定したのであつた。

この時、対馬の島民は、蒙古の使節に対して、なかなか鼻息があらく、使節の上陸をこぼんだと伝えられておる。

使節の一行は、国書の返書もえられず島民からも歓迎されなかつたので、非常に憤慨して帰つたが、その時に、島民の塔次郎と弥次郎と称する者二人を捕虜にして帰つたのである。

この二人の対馬の島民は、彼の地にゆくと、大変に優遇されたといわれておる。蒙古王、コツピツレツもこの兩人をみて大いに喜んだ。生きておる日本人をみて、始めて日本というものをみたと感じたのである。国書をやつても、返書もよこさない国からの捕虜なので、大変に興味を持ち、拝顔も許した。搭次郎、弥次郎の兩人も、その好遇に喜び、万寿山の玉殿や諸城を案内さ

れたが、「臣等、天堂仏刹あるをきく、正に是を謂うや」と、昭和戦後の代議士が、中京を視察した時のような賛辞を放ったといわれておる。

文永六年の七月に、蒙古王コツピッツは歓待した対馬の島民二人を、ウルダイという者に命じて返還を決定した。蒙古の使者ウルダイは、蒙古の中書省の国書を持って、高麗のキンイウセイ、コウヂュウ等の二人の使節を従えて、九月十七日に、再び対馬の伊奈浦に到来したのである。これで、蒙古は三度使節を日本に向けて出し、二度目の国書を日本にもたらしたわけである。

九月二十四日に、太宰府の守護所から、蒙古と高麗のもたらした国書を、京都の太政官に申し上げた。朝廷では、さっそく評議をひらいて、菅原長成をして返書をつくらせたのである。

その返書を国民の日本史から引用してみる。

「日本はこれまで支那と交通してきたが、蒙古の名は一向きかぬし、どこにある国か知らぬ。それで、日本は蒙古に対して、何等好悪の感情を抱いておらぬ。しかるに、好を通じないと、干戈に訴えようとは何故か。由来日本は神国と称せられて、神の威霊によつて、従来国辱を一度も受けなかつた。知慧や力では日本に打ち勝つことが出来ないのである。ついてはそれらのことを篤と考えるがよろしい」云々。

第二回目の国書は、第一回の国書よりは穏当であつたらしいといわれておるが、第二回目の蒙

古の国書に対する、わが方の返事はなかなか相当なものであることが、その語調でうかがうことができよう。

ところが、この菅原長成の返書は、朝廷から幕府に下されたが、幕府では、断然返書を送るの要なしと、決意をかためておつたので、この菅原長成の返書はついににぎりつぶされてしまい、第三回の蒙古の使者に対しても、何の返答も与えなかつたのである。

ついでであるからこの顛末を記述しておくが、蒙古は第三回の使節に対しても日本が国書の返書を与えないので、これを残念に思い、文永六年の十二月に、チヨウリヨウヒツを使として、再び日不に向かわしめた。返書のこないのは中間において、高麗が細工でもするものと思つたのか、蒙古の使者が必ず日本に到着するため、クリンチ以下の大将をして海軍の軍勢を引卒せしめて、金州等に軍兵を駐屯せしめて高麗を威嚇したのである。

チヨウリヨウヒツの一行は、文永八年の正月に高麗に到着し、わが国に到着したのは、聖人の竜の口の難の一週間後の九月十九日であつたのも不思議である。北条時宗は、蒙古襲来を文応元年より唱えておつた聖人を、十二年目に世を騒がすものとし七、文永八年の九月十二日に、斬首の刑に処そうとしたのであるが、聖人の首はきれず、次の日の九月十三日附で、蒙古人襲来すべき由の御教書を発しておるといふ、あわてたまねをしておるのである。これは後日詳細にのべる機会があるので、今は略す。

さて、聖人は一年の中に、三月と九月と、二度も蒙古の使節がくるといふ、事態は急なりと感ぜられて、この文永六年の十一月に、再び、先年のごとく、鎌倉の寺々に、書をいたして公場の対決をせまったが、多少の返事はあつても、正式に応ずるものとはなかつたのである。

すなわち十一月に

「今年十一月の頃、方々へ申して候へば、少々返事ある方も候、をほかた人の心もやわらぎて、さもやと覺したりげに候。(略)これほどのひがごと申して候へば、流死の二罪の内は一定と存ぜしが、いままでなにと申す事も候はぬは、不思議におぼえ候」(全集九九九ページ)

と太田金吾殿に書をあたえておるのである。

文永五年の第一回の蒙古の使節がきた年には、四月五日に安国論御勘由來を書かれたが、第二回、第三回と蒙古の使節が一年に二回もきた年の文永六年の十二月八日には、左記のごとく、聖人みずから、「立正安国論」に奥書をされたのである。

「文応元年之を勘う。正嘉より之を始め文応元年勘えおわんぬ。

去ぬる正嘉元年八月二十三日戌亥の刻の大地震をみて之を勘う。その後文応元年七月十六日を以て、宿屋の禅門について故最明寺入道殿に奉れり。その後文永元年七月五日大明星の時、いよ此の災の根源を知る。文応元年より文永五年後の正月十八日に至る迄、九か年を経て、西方大蒙古国より我が朝を襲うべきの由、牒状之を渡す。又同じき六年重ねて牒状之を渡す。既に勘

文之に叶う。之に准じて之を思うに、未来も亦然るべきか、此の書は徴しある文也。是偏へに日蓮の力に非ず法華經の真文の感応の至す所なるか。

文永六年十二月八日之を写す」（全集三三三ページ）

まことに一読してわれわれとしては、襟を正さずにおれない。しかるに小倉某が、

「安国論は平凡である。決して元寇を先見し、これを予言したものではない。法華採用をもとめんがためにつくつたものである。しかるに、文永五年に至り、突然蒙古のことの起つたのは日蓮の空言空論が偶々的中したのである。（空言空論と罵倒するなら的中も言わない方がよい。筆者注）日蓮はこれをもって大いに自負し、安国論は実にこの事件を先見し、安国の衷情に出たものであると称して、北条時宗以下幕府の老臣、建長寺道隆等僧侶に書を送って吹聴した。日蓮はこれによつて、未だ萌さないのに、元寇を先見したと言う。これは安国論を上つた時の精神ではないのである。何となれば、日蓮の安国論を上つた時から、蒙古来襲までは九か年をへだてている。その間、日蓮は一言もこれに言及したことがない。国家目前の大患を知るならば、なんで再三再四諫争しないのであるか、知るべし、日蓮に先見の明なきを。愛国濟度の心がなきことを」といつておるが、いろいろな見方もあるものだと思う。参考にかかげておくが、こういう人が、今でもいるのだから、われわれは聖人を讃仰すると共に、大いに折伏の精神を忘れてはならないのである。

聖人は、念、禪、真言、律その他諸宗を徹底的に批判し去つて、成仏の道に非ずというのだから、われわれは、聖人に対する諸宗の批難悪口を十分覚悟はしておかなければならない。ただし気にすることはないが、なかなか面白いとおうか、よくも、こんなことをいえたものだと思うような非難が最近あつたから一寸紹介しておこう。

本年の七月十一日付の中外日報に、渡辺照宏という人が書いておる。

「身延における日蓮のように、一方的な仕送りで食べさせてもらつていたことを、仏教者として、または一般の宗教家として、理想的な生活態度と思ひますか云々」いや、はや、聖人の罵倒にもいろいろあるが、これが、どこかの大学の先生とかの質問だから、信心のない人はおそろしい。今日本には宗教家も沢山いるし、宗教学者も大勢いるが、みんなに信心をしろという、理屈の本をかいておるだけで、自分は一向信心なんかしていないのだからこまる。特に学者という人にてんで信心がない。信心がなくて学問があるんだから、とても始末が悪い。「解あつて信なければ慢を生ず」ともいわれておる。

「衆生の根に利あり、鈍あり。鈍なる者は、信根あり、利なる者は智根あり。信根ある者は人を識りて法を知らず、智根ある者は法を識つて人を知らず」云々とあるが、聖人にとっては信は慧の因すなわち以信代慧であることを忘れてはならない。

